

あの教科書はさらに旅をして 坂井真紀子

フランス語圏チャド共和国に駐在が決まった時、独学でフランス語を始めた。スタートには小学生用の教科書が適当だと考えたが、現地では教材がどうにも手に入らない。チャドでは学校教育がまだまだ十分に浸透しているとはいえず、子供たちのための教材が独自に用意されているわけではない。さらに、もともと文字のない言語体系を基礎とした社会では、「本」や「教科書」という出版物がなじみにくい存在でもある。私は、そんなわけで一時帰国の折に日本やフランスで買った辞書や教材を使っていた。

もともと手あかのついた教材は、GEMという手のひらサイズの辞典だろう。ポケットにすっぽり入るし、仏和・和仏の基本単語が網羅されていて、使い勝手は抜群だった。今こそ電子辞書なるものがあるが、当時はまだなかったし、電気がほとんど通じていないチャドでは、紙に書かれたもの以外は信用できない。このGEM辞書を肌身離さず

持ち歩いて、頭の中でさまざまな状況をシミュレーションして常に作文をしていた。六、七時間もオフロードの道ばかりを走り続ける地方出張の時は、妄想に浸るいいチャンスだった。このGEM辞書は、チャドのひどい砂埃が背表紙に侵入するため、使い込むほどにどんだんページが外れてしまう。バラバラになりかけの辞書を輪ゴムで止めるのだが、日中五〇度を超える暑さに輪ゴムの劣化も早くあつという間に切れるのだ。あの辞書は、手あかと砂埃でほんとうに汚かったが、私の命綱だった。いま三代目が手元にあるが、これもチャドの埃をかみこんでポロポロ、ほぼ隠居状態である。

チャドであきらめた小学生の教科書に、最近、別の場所で巡り合えた。タンザニアとのひよんな縁から、スワヒリ語を学ぶことになったのだ。タンザニアでは、初等教育からスワヒリ語が使われ、様々な科目の教科書や辞書もそろ

っている。チャドでのフランス語と子供たちの日常的断絶に比べると、目を見張るような学習環境の充実ぶりである。道端には教科書を扱った古本屋が、様々な疲れ具合の教科書を並べて売っている。私はそこで、ダラサ・ラ・クワンザ（一年生）用のスワヒリ語の教科書を手に入れた。前の所有者の手あかの上に、私はさらにぐちゃぐちゃといろいろと書き込み、夜な夜な眺めてせっせと勉強をした。宿泊先のホテルの女性たちはみな親切で、私が初心者だと知るとスワヒリ語を教えてくれるようになった。毎晩ワイワイと笑いながらの学習は本当に楽しかった。

最初の調査が終わって帰国するとき、私のスワヒリ語の先生の一人マリウムが、こっそり私の部屋にやってきて、すまなそうにこう言った。「あのね、私、今度小学校に上がる息子がいるの。もしよかったらマキコの教科書を譲ってもらえないかな。彼女はまだ二〇歳、一人息子を抱えたシングルマザーだ。息子の父親は逃げてしまったのだという。」

私は「日本語でいっぱい書き込みがあるよ。それでもいいの?」と意地悪を言ってみた。マリウムは「そんなの全然かまわない」という。すごく愛着のわいたこの教科書を手放すのを、私はほんの一瞬ためらった。愛着とは本当に、厄介なものだ。

えいやと勢いをつけて、結局、私はマリウムに教科書をあげた。その時の彼女の喜びようといったら! 「個人の所有」という偏狭な何かがぶつ切り切れたあの時の感覚を、今でもなんとなく思い出す。わたしの汚い書き込みが、マリウムの息子の手元に行つて、さらに汚れていく。その教科書は、もしかすると弟や妹、いとこたちも使うかもしれない。そうやって子供たちが大きくなって、道端でスワヒリ語の新聞を読み、これからの生活のことを考え、政治の話をする。多くの人の手に渡るほうが、「私のもの」だと困い込むよりずっといい。あの教科書は、これからさらに旅をしていろいろな人に出会うのだ。

さかい・まきこ 総合国際学研究院准教授 開発社会学

愛への誘い〈文献案内〉

梶茂樹・砂野幸稔編『アフリカのことばと社会——多言語状況を生きるということ』三元社、二〇〇九年

グギ・ワ・ジョンゴ『精神の非植民地化——アフリカ文学における言語の政治学 増補新版』宮本正典・楠

瀬佳子訳、第三書館、二〇一〇年

竹村景子『ニューエクスプレス スワヒリ

語』白水社、二〇一〇年

